

## 可能性を信じる

2024. 8. 21

以前、ある本を読んだことがある。そこには、次のようなことが書かれてあった。

その人が、学生時代、スキーを習っていたときのことである。若手のスキーコーチの指導を受けながら、急な斜面を滑る練習をしていた。うまく滑れずに転んでばかりいたその人に、その若手コーチは、実に根気よく懇切丁寧にアドバイスをくれた。

しかし、何度トライしても、なかなかうまく滑れなかった。そのため、自分にはスキーのセンスが無いのかと自信を失いそうになり、さすがの若手コーチも、少し諦め気味になってきたときに、それを近くで見ていた年配のコーチがやってきてその人に言った。

「大丈夫だ。君は転び方がうまい。きっと上達するよ」この言葉に励まされて練習を続け、その人は急な斜面もうまく滑れるようになった。

その人は、なぜうまく滑れるようになったのだろうか。きっと、自分が励まされたのは、転び方がうまいと褒められたからではない。褒めるところのない状態において、転び方を褒めてまで上達を信じてくれる人がいた。そのことに励まされたのではないか。その人の可能性を信じること、それはもしかしたら、我々が人に対して捧げうる最高の贈り物なのかもしれない。

幼稚園にいと、子どもたちの無限の可能性を垣間見ることがある。子どもたちには、可能性しかない。そのことに、まわりの大人たちが、どのくらい気づいているか。それによって、子どもたちの可能性は、無限にも有限にもなってしまう。

幼稚園から小学校、そして中学校へと進むうちに、無限であるはずだった可能性が、どんどん狭められていくということはないだろうか。小学生、中学生、高校生、若者には、無限の可能性がある。若いうちは、何も決まっていはいない。決めるのは、自分である。自分の可能性を信じて、自分の道を進むことができるか。

今まで、自分のことを信じてくれた人に出会うことはできただろうか。出会えたという人は、幸せである。学校をはじめ子どもたちの前に立つ大人は、子どもたちの可能性を信じ、子どもたちを励ます存在でありたい。